

武蔵国多摩郡戸倉新田の人口

高橋 美由紀

【要旨】

近世の人口は、全国的にみると17世紀に増加を見た後、18世紀に入ると停滞し、飢饉で減少を経験し、幕末から明治初期の増加までは3000万人前後で推移した。しかし、地域的に観察した場合は増加地域と減少地域とに分かれる。本論では、武蔵野国多摩郡戸倉新田の人口を観察し、その増加が何に起因したのかを考察する。

【キーワード】 歴史人口学、新田、地域

1. はじめに

現代の日本では、少子高齢化が問題とされ、政府が合計出生率の数値目標を1.8と定めるなど、人口問題が重要視される傾向にある。また、各地方自治体においても人口減少が地域を脆弱にするとの懸念からさまざまな人口増加政策を打ち出している。2015年には1920年の国勢調査開始以来初の人口減少を憂える声が高まった。ここから、「日本初めての人口減少」のようなイメージが創られることがあるが、実際には歴史を振り返ると日本の人口は常に増加していたわけではない。さらに、地域的に観察すれば、減少していたところもあれば、増加していたところもある。それでは、このような差は何によって生じたのだろうか。筆者はこれまで、東北地方において人口が減少した農村に隣接しながら常に人口を増加さ

せてきた中小都市に関しての研究をおこなってきた。そこで見いだされたのは、人口を支える経済的基盤の存在と中小都市へ人口を送り出してくる地域の存在であった。このような構造を確認し検討することは、現代の地域人口の将来を考える上でも一定の示唆を与える。また、都市の安定を考える上でもその経済を支えた農村の実態を確認することは重要である。

歴史人口学は、現在良質なデータを提供する人口群を中心に研究を深化させている。しかし、それとともに日本の多くの地域の人口データを整理し検討することもまた必要と思われる。そこで、本論では、歴史的な人口に関する多くのデータを集積するという観点から、近世における武蔵国多摩郡戸倉新田の人口を観察する。そして、地域と人口との関係を考える。

2. 設定

2-1. 戸倉新田と近世の新田村

戸倉新田は、現在は東京都国分寺市戸倉であり、西武国分寺線の恋ヶ窪駅を跨いで広がっている(図 1)。享保期には、幕府が新田開発を奨励したことにより、武蔵野の土地に新田として、80 ほどの村落が形成された¹。1739(元文 4)年の「南北武蔵野出百姓草分書上帳」によれば、戸倉新田は初期世帯数では多い方から数えて 22 番目に位置し、当初の世帯は 21 軒であった。新田開発に関しては、水利関係の観点からの地理学の研究や社会制度史の研究をはじめとする多くの論考がある。新田に関する研究史に関しては、木村礎(1964)『近世の新田村』に端的にまとめられている。

戸倉新田は、1729(享保 14)年に、現在はあきる野市である戸倉村の郷左衛門が開拓をおこない、名主として村政を担ったとされる。郷左衛門家には多くの年に何名かの下人が見られる。1761(宝暦 11)年に、代官伊奈半左衛門²役所に提出された「出百姓書上帳」には、当時の 42 軒の出身地と移住年次が記されている。

¹ 木村礎(1964)。初期世帯数に関しては、pp. 190-191 の表による。

² 江戸中期の関東郡代。



図1 戸倉新田の位置

(国土地理院地図より作成)

それによれば、「戸倉新田」という地名ではあるが、初期の村落構成世帯において戸倉村出身者は郷左衛門を含めてわずか3軒に過ぎず、一番多いのは檜原村出身者24軒であり、そのほか宅部村4軒、深沢村2軒、砂川村2軒、小川村2軒、野中新田2軒、榎戸新田1軒、木引村2軒である。戸倉新田は、本町新田、番場新田、四ツ谷新田、下谷保新田によって形成されるが、史的には戸倉新田と四ツ谷新田の二つに分かれて記されている。1771(明和8)年からは、満福寺の住職が宗門人別帳に年齢も付して記載されるようになった。新田成立当時には、戸倉新田に寺は存在しなかった。村人の菩提寺は野中新田鳳林院、ついで中藤新田観音寺に変わった。しかしながら、菩提寺が遠方であっては不便であることから、名主郷左衛門をはじめとする村役人が代官伊奈半左衛門に1745(延享2)年に引寺を願い出た³。もっとも、残存する宗門人別帳のはじめから菩提寺は満福寺であっ

³ 片山(1959).

たが、当初は住職が在村していなかった。満福寺は、檜原村禪宗吉祥寺の末寺である。

2-2. 史料⁴

本論で用いる史料は、国分寺市立図書館蔵、戸倉義助家古文書に属する「宗門人別帳」である⁵。史料は、1752(宝暦2)年から93冊が残存するが、今回は連続して残存する1757(宝暦7)年から1861(文久元)年まで、89年分を用いた。なお、史料欠年は、1762, 1772, 1773, 1774, 1776, 1782, 1784, 1792, 1796, 1806, 1807, 1827, 1851, 1856, 1857, 1859年の16年である。ただし、1767年に関しては、史料の損耗が激しく一部の人口が欠損している。本論では、これをBDS(ベーシックデータシート)と呼ばれるシートに書き写したものをを用いて分析をおこなった⁶。

3. 武蔵国の人口と戸倉新田

江戸時代の全国人口の集計値に関しては、幕府国別人口調査の値が1721(享保6)年から1846(弘化3)年まで、ほぼ6年おきに知られている。この値は、関山直太郎がまとめ⁷、その後に速水融監修、内務省内閣統計局編纂(1993)『国勢調査以前日本人口統計集成 別巻1』東洋書林に掲載されている。これによれば、戸倉新田が含まれる武蔵国の人口推移は図2のようになっている。18世紀第二四半世紀から18世紀後半に向けて武蔵国の人口は減少し、19世紀は停滞して明治期の増加をむかえる。東日本地域は、飢饉の被害などにより人口が減少・停滞した地域が多く、特に北関東では人口減少が見られる。これに対し、戸倉新田の人口は、18世紀中頃から19世紀初めにかけて堅調に増加している(図3)。東日本の

⁴ 戸倉新田の史料は、立正大学古文書研究会により整理され目録になっている。

⁵ 史料表題は、「宗門御改帳」「人別宗門帳」「人数書上帳」などとなっている。

⁶ BDSは、麗澤大学人口・家族史研究プロジェクトのものを用いている。史料利用にあたって、プロジェクト代表黒須里美氏に感謝する。

⁷ 関山直太郎(1958)。

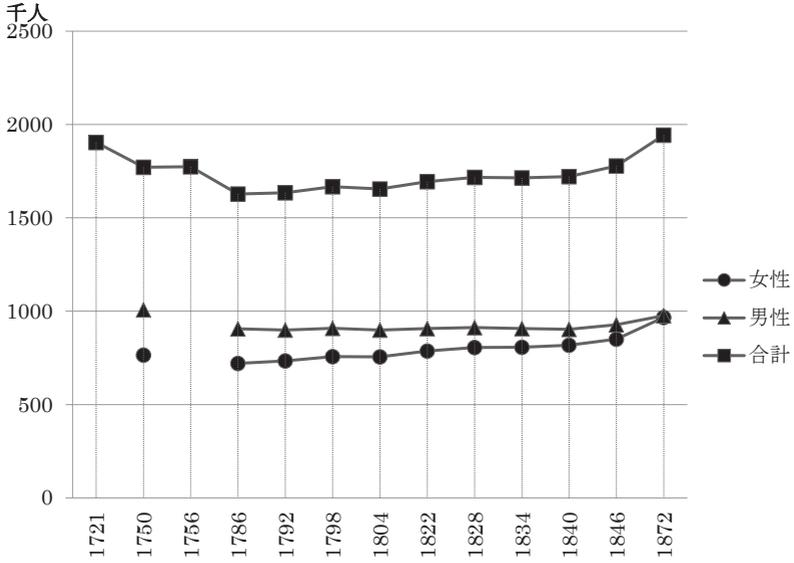


図2 武蔵国の人口推移

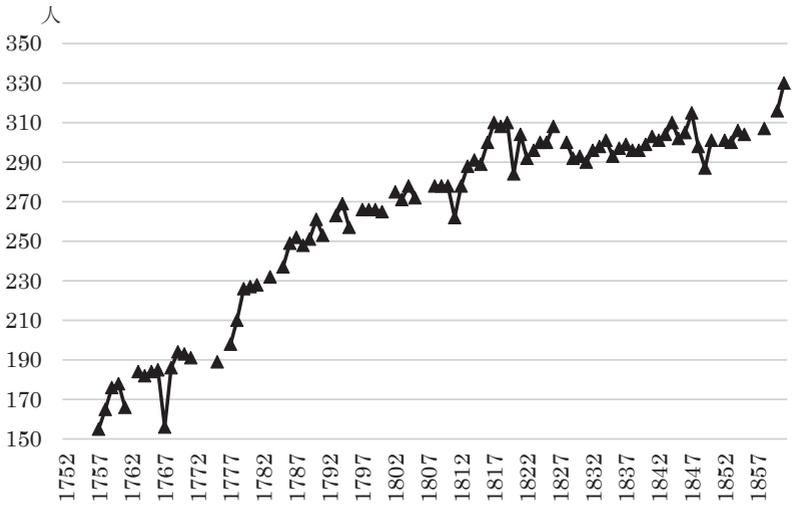


図3 戸倉新田の人口

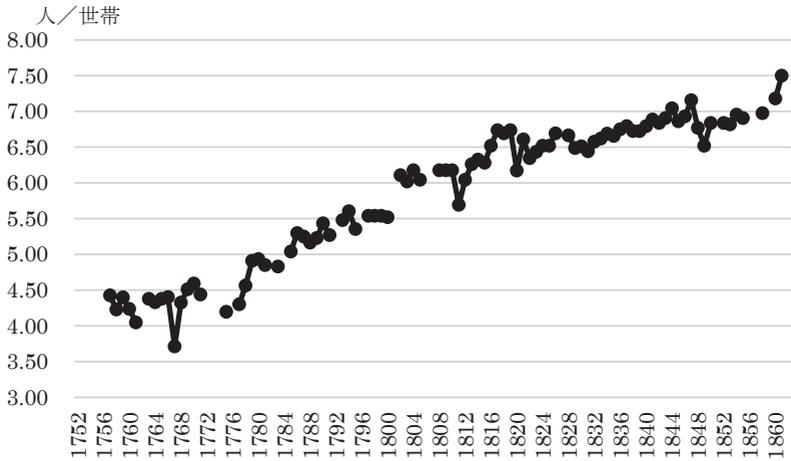


図4 世帯規模

多くの地域で天明の飢饉時(1782から1788頃)は人口が減少するが、ここでは特にその被害も観察されない。1819年から20年に掛けて若干の人口減少が見られるが、すぐにもとの水準に回復している。

戸倉新田の世帯数は、1757年が35軒、1758年に39軒まで増加し、その後若干の増減はあるものの、だいたい40軒台で推移している。この間、人口が増加したため、世帯規模は拡大した(図4)。1840年以降の世帯規模は、ほぼ7人であった。このような、世帯規模の拡大は速水が主張する、江戸期の特色とされる「複合大家族制から単婚小家族」と矛盾するようにも思われる⁸。もっとも、家族構造の変化があったとされるのは江戸初期であり、ここで見られた世帯規模の変化は、家族構造の変化というよりも、出生数の増加や長く生きる人の増加による世代数の増加と考えることも出来る。

男女別人口では武蔵国全体でも男性のほうが多く、これは男性労働を必要とする都市およびその近郊の特徴とも考えられる。戸倉新田でも観察期間の初期を除けば、性比はほぼ100を超え、若干男性のほうが多い(図5)。

⁸ 速水融(2011)。

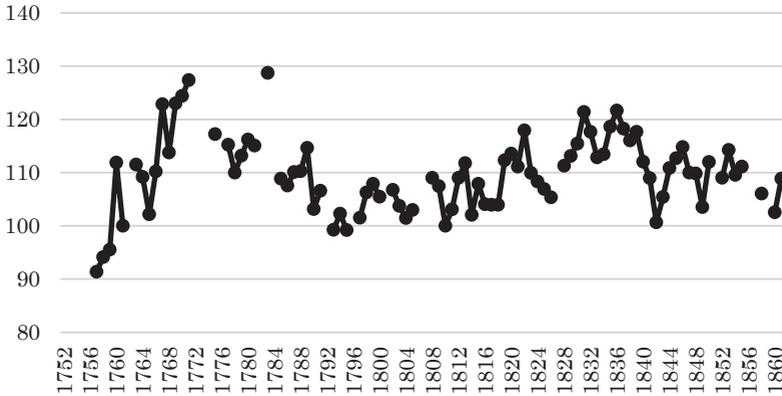


図5 性比

史料の最初と最後の年齢別人口構成を描いてみると図6のようになる。1757年に関しては、人口が155人と少数であることから、凹凸の多いグラフにならざるを得ない。1861年の図は、35歳以下がそれ以上に比して多いという特徴がある。これに関して、35歳の人口が生まれた34年以前の1827年頃に何か人口増加に関して特徴のある変化が生じたのかと考えたが⁹、図3からは特に大きな変化は推察出来なかった。

そこで、奉公人が多いためにこのような形状になったという可能性を探るため、1861年の人口について戸主との続柄を確認してみた(表1)。しかしながら、35歳以下の続柄として多いのは、息子を表す「男子」の71人であり、それに娘を表す「女子」の47人が続く。奉公人は、女性が7名男性が2名であり、特に多いわけでは無い。ただし、続柄として「弟嫁」や「甥」「姪」などの直系親族でない者もみられ、1861年においてこのような複合家族も存在したことが分かる。また、「彦孫(曾孫)」が見られるなど、直系親族においても多世代が同居していたことが伺える。76歳以上の個人も男性で3名女性で6名おり、この年の最高齢は女性の85歳である。

⁹ 本論では、史料記載年齢である数え年を用いている。このため、出生時の年齢は1となる。

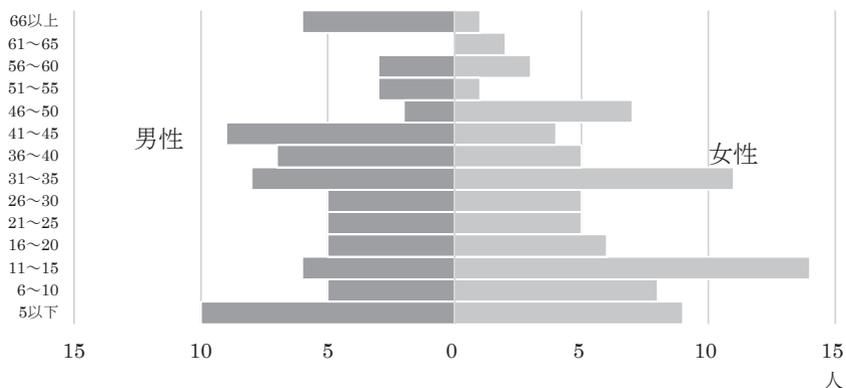


图 6-1 年齢別人口構成 (1757年)

N=155

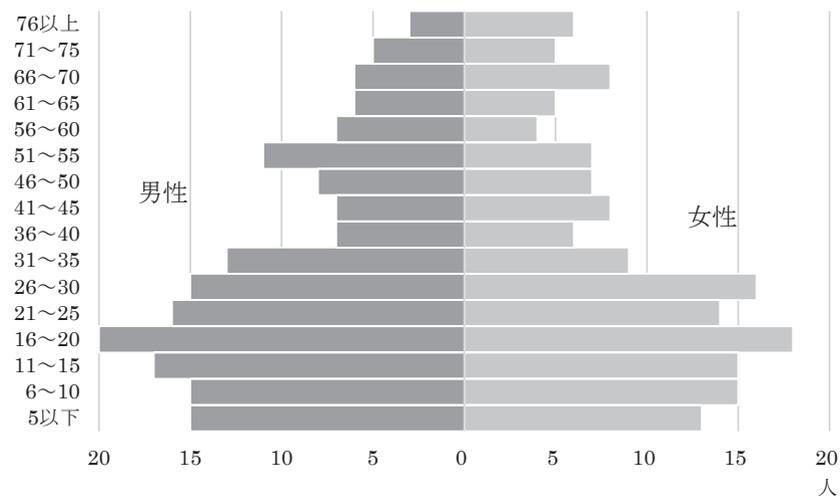


图 6-2 年齢別人口構成 (1861年)

N=327

表 1-1 1861年 戸主との続柄 全年齢

続柄	女性	男性	合計
男子		77	77
戸主		48	48
女子	48		48
妻	40		40
孫	14	18	32
母	17		17
嫁	15		15
弟		9	9
妹	8		8
下人	5	2	7
父		5	5
兄		4	4
甥		3	3
姪	3		3
聾		2	2
兄嫁	2		2
孫嫁	2		2
弟嫁	2		2
伯父		2	2
彦孫		1	1
総計	156	171	327

表 1-2 1861年 戸主との続柄 35歳以下

続柄	女性	男性	合計
男子		71	71
女子	47		47
孫	14	18	32
嫁	11		11
妻	10		10
戸主		8	8
下人	5	2	7
妹	7		7
弟		4	4
甥		3	3
姪	3		3
聾		2	2
兄		2	2
孫嫁	2		2
弟嫁	1		1
彦孫		1	1
総計	100	111	211

4. 戸倉新田人口変動の中身

戸倉新田の宗門人別帳には、残念ながら移動の記録が史料最後の頃をのぞき、ほとんど記されていない。そこで、流入および流出といった社会増加に関しては、史料の続柄が「下人」など奉公人を示す場合には、流入を「奉公」、流出を「奉公戻り」とした。同様に続柄が「女房」となって現れる場合には、流入を「結婚」

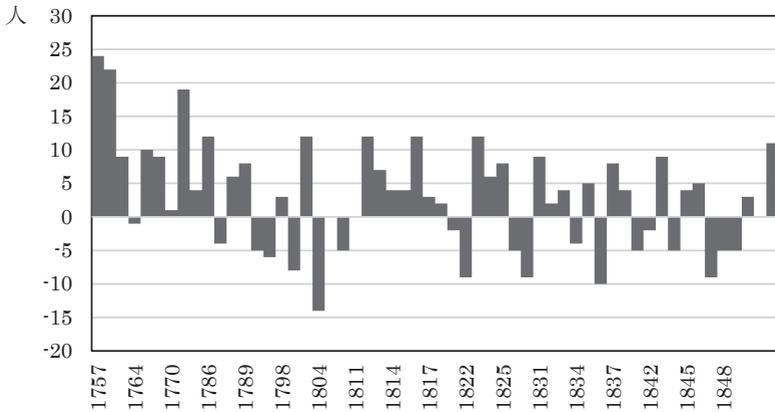


図7 純人口増加

としたが、この個人が流出する場合には「離縁」と「死亡」など複数の理由が考えられることから、「理由不明出」と分類した。流入に関しては、史料に記載される続柄から上記のように補ったが、流出に関しては、たとえば、適齢期の女子が書かれなくなる場合には「婚出」の可能性が高いと考えられるが、确实ではないため「理由不明出」に分類した。

また、自然増加に関しては、史料に記載が無い場合、3歳以下で登場する者を「推定出生」、5歳未満あるいは60歳以上で史料からいなくなる者を「推定死亡」とした。史料の終わりの頃には「ケス」「死」など死亡を表す表現も見られた。

いま、史料の欠年およびその前後など、記載に信頼がかけない年次をのぞいて、純人口増加を示すと図7のようになる。多くの年において人口が増加している場合が多いが、経年的に考察すると増加量が減り、減少の年が増えていることが分かる。これは、図3の人口趨勢が1815年あたりから停滞していることから知られることが出来る。

減少に関しては、「死亡」「奉公戻り」のほかは「理由不明」に分類しているので詳細が分からない。しかしながら、前近代社会の常として幼年人口の死亡が多いことが推測された。また、増加に関して、記載に信頼がかけられる最初の年である1757年と最後の年である1854年を比較する(図8-1, 図8-2)。両者に共通してい

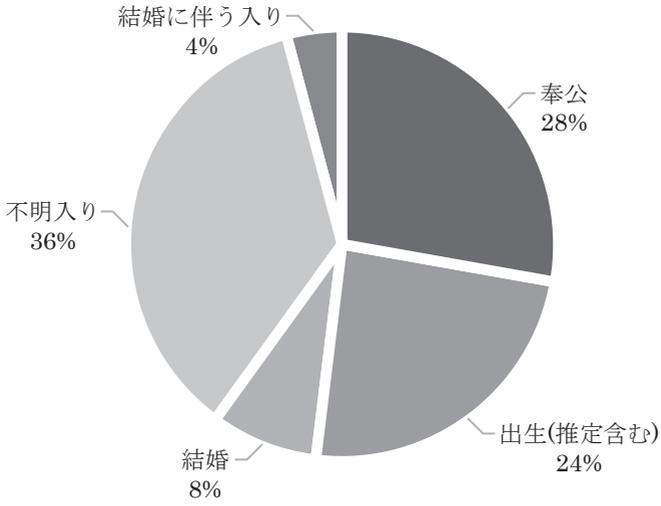


図 8-1 流入 (1757年) N=25

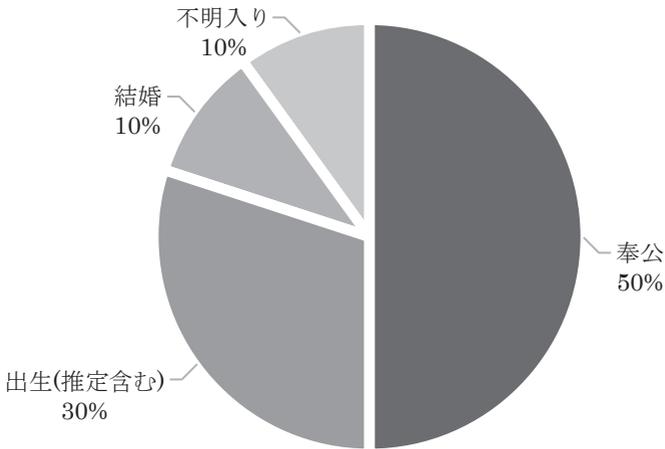


図 8-2 流入 (1854年) N=20

えるのは、奉公のために流入する個人が多いことと、出生件数が多いことである。1854年になると、理由が不明の流入者が少なくなっている。

奉公に関しては10歳などかなり年齢の低い者も見られる。また、奉公年限は1～2年など短いものが多い。例外として、4歳での出現時には「下女」と記載されたものの、その3年後には「女子」と記され36歳まで世帯内にとどまったものもある。奉公人がどこから来たのかは、人口の移動を考える上で重要だが、残念ながらほとんどの年に移動に関する記載は無い。例外として1861(文久元)年の史料には奉公人の出身元に関する記載が若干見られる。それによると、師岡新田から13歳の「かる」が奉公に来たことが分かる。また、小川新田から「孫を引き取った」という記載や「養女を出した」という記載がある。そのほか、関野新田への「嫁入り」や小川村から「嫁をもらった」という記載がある。師岡新田、小川新田、関野新田はいずれも武蔵野の土地に開発された新田であり、新田間での人の移動があったことが分かる。

このほか、史料には「夫婦養子」が多くみられた。1800年以前には6組、以降には2組が夫婦養子として入ってきた。これは、世帯継続のための手段として用いられたと考えられる。

世帯の継続と言うことに関して、名主の郷左衛門の家がどのようにして史料最初の年から最後まで継続できたかを調べてみた。1757(宝暦7)年に34歳の郷左衛門とその妻「ひさ」は、翌1758年に女子「むら」をもうける。その後、「もん」「さよ」「重蔵」が生まれるがいずれも10歳になる以前に史料から消えてしまう。そこで「むら」が茂平次という婿をもらい家を継ぐが、史料には茂平次が登場したときから「男子」と記載され「むら」が「嫁」と記載される。茂平次と「むら」は、男子3人女子1人の子宝に恵まれるものの、そのうち女子は10歳までに史料から消えている。後を継いだ平次郎以外の男子はそれぞれ34歳と19歳に史料に記載された後はいなくなっている。平次郎は「もと」という嫁をもらい、やはり4人の子どもをもうける。そのうち女子3名はそれぞれ2歳、24歳、16歳を最後に史料からいなくなる。おそらく、最初の2歳で消える女子は夭折、それ以外の2人は婚出したのではないだろうか。後を継いだのは男子常五郎であるが、彼は両親が1822年に史料から消えてしまうため、13歳で家督を継ぐ。もともと、

この時点で彼の祖父母は健在であった。彼は、「ゆり」という嫁をもらい、二男四女をもうける。このうち、女子三人はそれぞれ21歳、8歳、5歳で史料からいなくなっている。後を継いだのは長男の平次郎で、「もと」という嫁をもらい、長女「ふじ」をもうけたことまでが分かる。この期間に戸主となったのは五名であり、そのほとんどの者が「郷左衛門」の名を継いでいる中、聲の「茂平次」はそのままでの名前で記載されていた。

5. 考察

今回取り上げた「新田村」は、その成立が江戸期中頃であり、江戸初期やあるいはそれ以前から存在した集落とは若干異なる。新田開発に当たっては発起人がおり、また新田開発をするための理由が存在した。その理由は、「新しい耕作地を求める」ということであるから、出身村落においては十分な耕作地が存在しなかったと考えられる。すなわち、流入元の土地において人口を押し出す要因が存在したわけである。戸倉新田において初期の多くの開墾者の出身地である檜原村は山村であり、田は無く畑も少なく薪炭稼ぎで生計を立てていたが、それも売り捌くためには遠い距離を歩かねばならなかった。このようなことから、新天地を求め、武蔵野における新田開発に携わったと考えられている。しかし、新田開発も苦勞が多いものではあった。新田での経済活動として、畑作物などを山間部へ運んで売り捌くといったこともおこなわれていた。売り捌いた品の中には「蚕種」もみられる。山間部で養蚕をおこなっていたことは想像に難くないが、新田でもそのような農間稼ぎがおこなわれていたのではないだろうか。そして、それは女性の労働であったことも考えられる。

6. おわりに

戸倉新田の初期人口増加は、奉公人数と出生数の増加によるものであった。奉公人の増加という観点からは、新田が開発されていく過程で多くの労働力を必要としたこと、また、史料に記載は無いが奉公人の出身村落において労働需要が少

なかったことが考えられる。いっぽう、出生数の増加という観点からは、新田開発の労働が過重であったとしても、多くの世帯において家族を養い家を継続させていくことが可能であったことを示している。そして、戸倉新田における高齢者の存在は、世帯の安定を推察させる。では、村が発足して安定していくために何が必要であったのか。どのような経済的背景が存在したか。また、新田村における女性の労働事情や出産・子育ての状況の詳細についても具体的に探してみたい。いずれも、今後の課題である。

【史料】

戸倉義助家文書(国分寺市立図書館蔵)「宗門人別帳」

【主要参考文献】

片山迪夫(1959)『戸倉新田とその出百姓——享保の武蔵野新田』多摩文化叢書〈その1〉, 多摩文化社

木村礎(1964)『近世の新田村』吉川弘文館(新装版1995)

関山直太郎(1958)『近世日本の人口構造』吉川弘文館

速水融監修, 内務省内閣統計局編纂(1993)『国勢調査以前日本人口統計集成 別巻1』東洋書林

速水融編(2011)『歴史の中の江戸時代』藤原書店

【主要参考HP】

国分寺市立図書館(2017/1/8)

<https://library.kokubunji.ed.jp/index.html>

国土地理院(2017/1/8)

<https://maps.gsi.go.jp/>

* 本稿は、平成26年度科学研究費基礎研究(C)26380441「江戸時代の少子化問題」の支援を受けている。また、データ作成にあたっては持田敏子氏の協力を得た。記して感謝する。